

ハンセン病問題

ハンセン病とはどんな病気？

ハンセン病は、「らい菌」という細菌に感染することで起こる病気です。昔は「治せない病気」や「親から子へ遺伝する病気」と怖がられていました。でも実際は、「らい菌」は感染力がとても弱いので、他の人にうつりにくい病気です。また、治療薬も作られていて、今では早く病気を見つけてきちんと治療をすれば、後遺症を残すことなく、病気を完全に治すことができます。



ハンセン病の正しい理解

- ・ハンセン病は「らい菌」による感染症
- ・「らい菌」は感染力が弱く、非常にうつりにくい
- ・感染してもほとんど発病しない
- ・現在は治療法が確立されている
- ・早期発見と適切な治療で、後遺症を残さずに治すことができる

ハンセン病への偏見や差別



ハンセン病は、体の一部が変形したりする外見の変化があることから、昔から偏見や差別を受けることがありました。さらに、ハンセン病患者を強制的に隔離する政策がとられたことにより、患者や回復者、その家族への偏見や差別がさらに広がってしまいました。これにより、ハンセン病の人たちは長い間つらい思いをしてきたのです。

今、私たちが出来ること

「らい予防法」が廃止されてから 30 年経った今でも、ハンセン病に対する偏見や差別は残っていると多くの入所者や社会復帰者は感じています。ハンセン病に関わるすべての人が偏見や差別で苦しむことがないよう、正しい知識と理解を持つとともに、偏見や差別をなくすにはどうすればいいのか、自分たちには何ができるのかを考えていく必要があります。



宇陀市人権啓発活動推進本部



2026.2

※このビラへのご意見・ご感想は
☎0745-82-2147または jinken@city.uda.lg.jp

毎月 11 日は「人権を確かめあう日」です